

氏 名 : 高橋 敦志
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第387号
学位授与年月日 : 令和4年3月15日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : コーチングによるメディア・リテラシーの学びの支援に関する研究
論文審査委員 : (主査) 教授 和田 正人
(副査) 准教授 高橋 純 教授 野中 陽一
教授 加藤 千香子 教授 保坂 亨

学位論文要旨

本研究では、メディア・リテラシーを学ぶ学習者に対し、対話を通じた意識化を目指すコーチングによって学習者の学びを支援する実践を行い、学習者の成果物を質的に分析することでコーチングの効果を明らかにすることを目的とする。

メディア・リテラシー教育を理論化した Masterman (1985) は、その教育方法を Freire (1970a) の課題提起教育に求め、「対話—省察—行動」という方法を踏襲している。教師から生徒へ知識を与える銀行型教育を批判した Freire は、リテラシー教育において、学習者は自身の状況を意識化することが求められるとするが、その状況に埋没しているために意識化することが難しい。しかし、教育者の働きかけにより、自らの状況性を省察することを通して客観的課題状況として把握することが出来るとする。この教育では、教師と学習者の間に対話が必要とされ、成長する過程に対して共同で責任を負う。また、Wallerstein ら (2004) は「傾聴」を、Noddings (2013) は教師が学習者の「表明されたニーズ」を「聴き取る」ことが重要であるとしている。Freire に対する「教化」と「解放」に関する批判 (佐藤 2021) や、Masterman に対する権威主義的な側面に関する批判 (Buckingham 2003) は、教師と学習者の関係性の変化や「対話」、「意識化」などに焦点が当てられている。しかし、「意識化」や対話の本質である「省察」や「行動」(Freire 1970a) を可能とする具体的な方法にまでは言及されていない。そのため、本研究では、積極的傾聴や質問を通して対話による気づきや意識化を促し、学びに対する責任感を育み、自律的な学びを促進しながら学習者の学びと成長を支援するコーチング (van Nieuwerburgh 2012) に着目し、実践研究を行った。

実践は、埼玉県にある高等学校の情報科選択科目「メディア・リテラシー」を受講した受講生のうち、コーチングによる学びの支援を希望した学習者に対して、コーチングを行った。また、質的分析の対象を、コーチングを受けた学習者3名が作成した振り返りシートとした。質的分析の方法として、小規模データに適応可能であり、分析過程の省察可能性と反証可能性、理論的コーディングと質的コーディングの統合などの特徴がある SCAT (Steps for Coding and Theorization, 大谷 2007) を用いた。

SCATによる質的分析をした結果、35個のテーマ・構成概念が抽出され、5個のカテゴリーと13個のサブカテゴリーに分類された。具体的には、「目標の意識化」や「目標の発展」といった「目標」、「方法の具体化」や「実践の場の意識」といった「実践」、様々な「気づき」における「意識化」、「対話」や「意欲」、「感情」などの「セッション」に関する記述が明らかとなった。また、コーチと学習者が協働で設定した合意に基づくフィードバックによる支援で、セッションを積み重ねた学習者及び1回のセッションのみでその後の学びを進めた学習者全てに、「意識化」や「自律的な学び」が見られたことが明らかとなった。一方、コーチングを受けなかった学習者の振り返りシートも分析し、8つのテーマ・構成概念が抽出され、3つのカテゴリーと4つのサブカテゴリーに分類された。具体的には、「目標の意識化」に含まれる「目標設定」、「気づき」や「省察」の「意識化」などが明らかとなった。しかし、その目標に対する具体的な「気づき」や実践の方法、省察などの記述は見られなかった。これにより、コーチングによる学びの支援は、「対話」を通じた「意識化」を可能とする方法として有効であり、学習者の学びと成長を支援することが出来ることが示唆された。

今後の課題として、学習者が複数のコーチから自身に合うコーチを選び出す環境を整えたり、コーチが教員をコーチすることや学習者が学習者をコーチングしたりすることによる学びの支援、および様々な校種や学年、教科での実践を通してコーチングの効果を研究し、実践に返す実践—研究の往還の必要性が挙げられる。